僕

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕

【Ｎコード】
Ｎ４２６６Ａ

【作者名】
ＮＡＯ

【あらすじ】
ピアニスト志望の少年と、失語症でもあり重病人でもある少女。暗い現実の中でもがき、明日を求めようとする二人。そんな二人は、ある約束を交わす。その約束は、意外な形で果たされるのだった。

第一話

――僕に、才能などあるのか？

僕にとって最も重要で、最も大きな問いである。

知りたい。

切に思う。

しかし、知りたくないとも思う。才能があればいいが、もし無かったら、きっと僕は――

ピアノで生活をまかなおうと決心したときから、その問いは僕についてまわった。

曲目を演奏しているときも、歩いているときも、人と会話しているときも、眠っているときでさえ、その問いは僕の心を悩ませる。

最近は特に酷かった。

些細なことで苛立つようになり、自分で言うのもなんだが、あまり社交的ではない僕は、それを人とのコミュニケーションなどで発散できずにいた。

そのせいだろうか、僕の音色は汚濁された湖水の如く、透明度を失っていった。

そんな日は、ピアノを見るのでさえ憂鬱になる。

『どうしたの？』

「……なんでもない」

僕は差し出された紙に目を通すとそう言った。

『顔色悪いよ？』

再び、紙を差し出す。

僕はそんな執拗な彼女を一瞥すると、彼女は僕を心配そうな顔で見つめていた。

――僕はその顔が嫌いだった。

彼女――千夏（ちなつ）は理解しているのだろうか。

精神的ストレスからくる失語症、更には重度の癌という二重の病気に侵されていることを。

知らないはずはないのだ。彼女は担当の医師から告知されているのだから。

にもかかわらず、自分の心配をせずに僕の心配をしてくるところが、僕はたまらなく嫌だった。

僕はそんなに惨めなのか。

病人に心配されなければならないほどに。

『またピアノ聴きたいな』

首から提げた金色のケースを開けて、中に入っている紙にそう書き込むと、紙をちぎって僕に渡す。
僕はその紙を見て、千夏との邂逅を思い出した。

僕は放課後の学校で、一人寂しくピアノを弾いていた。
ピアノは本来一人で弾くのが普通だが、僕にとってピアノは友人以上関係だ。
僕がピアノを弾こうとするから、ピアノも音を奏でてくれる。
だから、二人で弾いていると感じる。

しかし、その日、ピアノは死んでいた。

否、僕が死んでいたと言ったほうが正しいか。
僕は、才能の有無を確認しようとしていた。

才能があるなら、きっとどんな曲も体現できるはずだ。
才能があるなら、一分の狂いもなく鍵盤を叩けるはずだ。
才能があるなら、完璧に弾きこなせるはずだ。

僕は才能と、自分自身と戦うため様々な曲を弾いた。

ショパン作曲、エチュード第五番変ト短調《黒鍵》。
ベートーヴェン作曲、ピアノソナタ第十四番嬰ハ短調《月光》。
同、二十三番ヘ短調《熱情》。

特に自分の嗜好など考えず、取り出す楽曲を手当たりしだい弾いていった。
劇的かつ荘厳な序奏部に、僕の体が大きく動き、やがて堰を切っ

たように指を流動させる。
まさに指自体が意識を有する生物の如く、息つく暇も与えずに、鍵盤を縦横無尽に跳ね回る。
呼応し、動きを増す僕の身体。
今持てる僕の力全てを、ピアノと僕の指に注ぐ。
僕に才能があることを信じ、また、それを確認するため。

僕にはきっと才能がある。
才能を開花させるための努力も人一倍している。才能がないなんてありえない。
きっと……きっと弾ける。

しかし、そんな希望的観測とは裏腹に、僕の心は満たされず、ただ空虚感だけが増していった。
僕は恐れていたのだ。
僕の中にその空虚感を作り出すもう一人の僕がいることを。
誰より冷静な僕。
現実を直視し、世の中を諭そうとする僕。
そのもう一人の僕は、僕がピアノを弾いていると、決まって僕に囁きかけてくる。

――コンクールで入賞も出来ないのに、才能なんかあると思っているのか？

そして、僕は思ってしまう。

――僕には才能が無いのではないか。

そんな、夢をうがつ空虚感をもう一人の僕は作り出す。
僕の指が隣の鍵盤にかすってしまった。

――ほら、無理だろう。才能がないからだよ。

今度は、かすっただけでなく、調子の狂った音を曲の中に入り込ませてしまった。

――ほらね、才能がないから……。

僕の集中力は、壊れるようなピアノの音とともに崩壊した。
思い切り鍵盤に叩きつけた指は悲鳴を上げ、僕も心の中で悲鳴を上げる。肌にじっとりとまとわりつく汗は、心身の疲労を如実に証明してくれた。

「……」

僕の中に暗雲がたちこめていく。
僕の実力は、才能は、この程度かと思った。
子供が小さい頃、ただ純粋に好きなだけで将来の夢を語るように、僕もただ好きなだけでこの道を選んだに等しいと思った。

夢は所詮、夢でしかないのか。

遠い未来に輝いている夢は、僕が一生かかっても届かないくらい遠い未来にあるのか。

僕がどんなに全力で走ってもたどり着けないくらい、遥か遠くにあるのか。

過去の楽聖達は、その未来にたどり着くだけの才能があった。僕が一生懸命走っても追従できない、才能という馬を駆って、未来に、夢に追いついてしまう。

彼らが走る現実が、夢に重なってしまう。

そのとき僕は、彼らが潜り抜けた数々の障害に、捕まってしまっている。

そして、その間、未来は遠くへ、夢は更に遥か遠くへ、肉眼では捕捉できないくらいずっと、ずっと遠くへ僕を置き去りにする。

僕はいたたまれなくなった。

ピアノで生活をまかなう。

これほど安易で無謀な考えがあっただろうか。コンクールで入賞できないということは、すでにその時点で自分よりも優れた奏者がいるということだ。

日本だけで何人いるだろう。ましてや世界では。

自分と同じ夢を志した者達の一体何人が生活をまかなえているだろう。

漠然とした未来への不安が、僕をさいなむ。

驕りも、自信も、努力も、結果の前では無力。

結果が全てだ。

受賞までの過程など、審査員には関係ない。

彼らは、奏者の能力と、才能を審査する。努力は審査しない。
ゆえに、受賞一歩手前であっても、受賞とはまったくの論外であっても、それらは全て、一つの同じまとまりに属する。
敗者というまとまりに。

僕は白と黒を見下ろしていた。

「弾けない原因は、僕じゃない」

嗜虐的な考えが脳裏をよぎり、自らの右手を鍵盤に乗せた。

「この指だ。この指が……」

意思は鍵盤蓋を下ろしていた。
右手に強烈な痛みが走る。
気持ちの悪い音がした。
つぶされた指が鍵盤を押す音。

僕は、右手に罰を与えていた。

なぜ命令に従わないのか。思ったとおりに鍵盤を叩いてくれないのか。
その罪を問うたのだ。
やがて、右手の小指が本来曲がるはずのない方向に曲がっているのを見て、僕は笑いながら泣いた。
これでは足らない。またこの指は間違いを繰り返すだろう。
そして、もう一度、鍵盤蓋を閉じようとした時。

彼女が止めた。

学校に私服という不釣合いな姿の彼女は、僕をなだめるような優然な笑顔を作ると、首から提げた金色のケースを開ける。
手馴れた作業なのか、紙にペンでさらさらと言葉を書くと、僕に渡した。

『私は好きだよ、君のピアノ』

救われた気がした。そして、忘れていた痛みが、再び僕を襲ったのだった。
彼女が学校に長期入院の申告をしていた先での、出会いであった。

僕が彼女と再会したのは、その翌日。
小指の治療で訪れた、この病院だった。

僕は病床に伏す彼女に、視線を送る。
彼女は同学年だが、僕より二歳年上だ。
理由は言わずもがな。病気のためだ。本来ならとっくに学校を卒業しているはずの年齢だった。
年齢差がそうさせるのか、性格がそうさせるのかは分からないが、彼女はお節介だ。
何かと僕に忠告しては、僕の神経を逆撫でさせる。

いい加減にして欲しい。かまわないで欲しい。

これは僕の問題だ。

だが、彼女から逃げるわけにもいかなかった。彼女の性格も理由の一つだが、僕は、彼女の母親から言わせれば、「千夏の唯一の友

達」らしい。
母親は僕に、千夏の話し相手になって欲しいと願った。
だから僕は仕方がなく――そう、仕方なくだ。あくまで仕方なくここにいる。

……右手が完治しているにもかかわらず。

『何か言ってよ……』

「もう聴けないかもな」

僕が自嘲を漏らすと彼女は、

『それって、私が死ぬから？』

などと書いてきた。僕は冗談ではすまない言葉に、苛立ちを覚える。
なぜ笑っている。なぜそんなことを書ける。死が怖くはないのか。
僕はそんな彼女を、いつの間にか睨み付けていたようだ。
彼女の相好が真剣味を帯び、ペンをとる。

『君の音が聴きたい』

『もう一度聴きたい』

二度続けた彼女の思いを受け取った僕は、自嘲と自虐を宿しつぶやいた。

「上手でもないピアノより、ＣＤのほうがいい……音は綺麗だし、間違うこともない」

僕は無下に彼女の要求を断った。

今のが本音なのを、僕は知っている。

僕の稚拙なピアノなど、一流の奏者をもってすれば塵芥にすぎない。

そう、才能の有無だ。

その一線が、乾坤を分かつ。

僕がうなづいて言った後、彼女は僕の頬を指で強くつねった。頬から伝わる痛みの波が、僕の暗澹たる心情を連れ去る。

『君のピアノがいい』

『君のピアノの、音色の中では』

『私が物語の主人公』

『君が私を主人公にしてくれる』

『一人ぼっちだった私が』

『主人公になれる』

彼女の声が――もちろん想像上の声だが、彼女の声が聞こえてくるようだった。

彼女は、顔を上げた僕に微笑みかけると、視線を壁にかけてある服に向けた。

僕もそれに倣う。

壁にかかっていたのは、制服だった。

僕の高校の制服。萌黄色の制服。

自分の着ている姿を想像しているのか、彼女は柔和な顔を浮かべている。

……一度、こんなことがあった。

彼女が、看護士や医師達の目を盗んで病衣から制服へ着替えようと書き出したのだ。

その紙をもらったときなどは、僕は自分の目を疑ったほどだ。

僕は当然の如く、彼女の案に反対した。

病人が、特に癌を患った重病人が、医師の承諾もなしに、勝手に制服に着替えるなど聞いたことがない。おそらく、前例もないだろうが。

なにより、とがめられるのは僕だと分かっていたから、必死になって止めようとした。

が、結局彼女が僕の前で脱ぎだしてしまったのだから手に負えない。

僕は仕方なく、病室の外で待つことになった。

制服を着た彼女は、意外なほど似合っていた。

やせた頬や、無駄な脂肪のない華奢な体格が、病人であることを際立たせたが、それを除けば僕の同級生その人だ。

『似合う?』

「……それなりに」

彼女が僕の気のない返事にため息をついた動作が、学校の教室にあふれる喧騒の中のそれに似ていた。

僕はそのとき、彼女と登校している自分を想像してしまい、頭を振った。

なぜ想像してしまったかは分からない。

社交的でない僕が抱いた羨望なのかもしれない。おそらくそうだろう。彼女との交流の中で、慣れきっていたはずの対人関係に亀裂が生じたといってもいい。

しかし、僕はそれを心の中に押し殺した。

生まれてはじめての場所に戸惑いを抱いた子供が、その場所から逃げ出すように。

しばらくして一足早く制服から視線を戻した彼女は、僕に紙を渡した。

『君と私、どちらが早いか』

『競争』

一枚の紙に大きく二文字、競争、と書かれている。

「これは？」

『私が治るのが早いか』

『君が入賞するのが早いか』

競争は僕の負けだと思った。

僕は今現在、三週間以上ピアノに触れていない。もはや、かつて

の自分に戻るだけでも、相当の努力と日数を費やすのは分かっていた。
まして、自転車のように一度乗れたら忘れない、などと都合よくいくはずがない。
僕は右手を開いたり閉じたりしながら、心中でつぶやく。

――お前は弾けるのか？

肯定的な返事が返ってきたとは思えなかった。

『決まり』

対して彼女は前向きだ。
明日の自分を見据えている。笑顔がある。
彼女の心の空には、一点の曇りも存在しないと思った。
そんな彼女なのだから、きっと失語症や癌など、当然のようにはねつけてしまうだろう。
終始笑顔の彼女が、次に僕に書いた紙の内容は、唐突なものだった。

『この花知ってる？』

「……知らない」

『これはね【月下美人】』

『この花はね』

『夏の夜に』

『たった四時間だけ』

『世界中で』

『一番美しい花になるの』

『だからね、私もこの花のように』

『少しの間かもしれないけど』

『立派に咲き誇るの』

「……」

釈然としない気持ちに包まれた。

彼女は本当に前向きと言えるのだろうか。前向きというよりは、むしろあきらめではないのか。

残された時間を精一杯生きよう。

それは抗うことを止めた者の言い訳にすぎないのではないか――そう思えたからだ。

僕は彼女の中に矛盾を感じた。

一つの人間の中に、二つの感情が内在している感覚。

多重人格とまでは言わないが、言葉の表層を紐解き、内部を見ようとすると、それは明確なる意思として形成される。

未来を信じ、生きる希望を持ってやまない彼女。

時間的制約の中で、出来うる限りの輝きを求めようとする彼女。

この二つが、今彼女の中に根ざしている。互いの尾を食らう蛇の如く。

僕は思考を停止し立ち上がる。

「……飲み物、買ってくる」

彼女に憐憫の情ではない、他の何かを感じたから。そのせいか、この場にいることが出来なかった。

第二話

――君のピアノの、音色の中では、私が物語の主人公。
――私が治るのが早いか、君が治るのが早いか、競争。

彼女の文字の一つ一つが僕の中で反芻される。
僕は考えていた。
才能のない僕になぜここまで求めるのか。僕の中で入賞など、夢のまた夢で、競争する以前に勝敗は決しているし、僕の下手くそな音色の中で、彼女を輝かせるのは不可能に近い。

才能のない僕には全てが――

……と、僕が心の中で念じかけたときだった。

眼前を医師と看護士が険しい表情を露にして走っていく。
彼らの声に、聞き覚えのある名前が混じっていた。

――千夏。

妙な胸騒ぎを覚え、僕は千夏の病室に急いだ。
そして、病室のドアから中に入った瞬間、驚愕の光景に言葉を失った。

声にならない悲鳴を上げながら、千夏がベッドの上で暴れていた。

四肢を激しくばたつかせ、顔や首にはおびただしい発汗、そして、その全てを凌駕する、彼女の表情。苦痛に歯を食いしばり、髪が張り付いた額には、苦痛を象徴するしわ。

その彼女を看護士が押さえつけ、その間に、医師が治療を施していった。

僕はその光景にたまらない恐怖を覚え、その場から逃げ出してしまった。

……彼女と目が合ったにもかかわらず。

しばらくして、医師が僕に、彼女が落ち着いたことを説明していった。

僕はあのときの彼女の目を思い出す。

彼女の目は、僕にこう言っていたように思える。

――タスケテ。

僕にはどうすることも出来ないのに。なのに、彼女の目は僕を求めていた。

僕は頭を抱える。
どうして。
どうして彼女は僕をそんな目で見る。
僕は医師ではない。それ以前に、そんな勉強もしていない。
ただピアノが好きなだけで、才能もない僕が、彼女を深遠の淵から救えるはずがない。

無理だ。

僕は彼女を救うことが出来ない。
だからその意思表示をしたまなざしで彼女を見つめ返した。
なのに彼女は、それでも僕に救いを求め続けた。
結局、僕は逃げ出してしまった。

――何で僕なんだ。

そう思ったから。
僕は彼女の病室の前まで来たが、ドアを開けられずにいた。
ノブを握ろうとする手が、小刻みに震えていた。
僕は恐れている。
ピアノに触れようとするときと同じように。
昔はこうじゃなかった。
生活をまかなおうと考えたときから、ピアノに触れることが、怖くてたまらなくなった。
上へ、より上へと行かなければならないという不可視の圧力が、僕の肩にのしかかってきた。
圧力に耐えられなかった僕は、唯一の居場所であるピアノから逃げ出し、この世をさまよっている。

未練ある魂のそれと同様に。
今、僕はそれを彼女に感じているのか。
そして、不意に思った。

――ピアノから逃げ、彼女からも逃げるのか。

僕は彼女にしてあげられることが、あるのではないか。
ある、きっとあるはずだ。
そう思ったとき、僕はすでに病室の中に入り、彼女のベッド脇に立っていた。
ベッド脇の机にはつぼみのままの月下美人と、テープレコーダーがあった。
いつだったかは忘れたが、僕の質問から逃れるように隠したテープレコーダー。
いまだその答えは彼女の中にある。
僕は渦巻く思考の中で、ほんの少しそれを思うが、まもなくもっと巨大な渦に飲み込まれていった。

――僕は、彼女に何を話せばいいのだろう。

あれだけ彼女の願いを断っておきながら、いまさら手のひらを返すように約束をするのか。
それは、最も薄情なことではないのか。
彼女の容態が悪化したから、仕方なく約束をするのは、本心での約束ではない。うわべだけの約束だ。
なら、僕は何を言うために彼女の病室に入ったのか。

言葉だけでは言い表せない心は、時に歯がゆく、時に罪深い。

まもなく、彼女の文章に思考をさえぎられた。

『私、死ぬの？』

僕に言葉はない。

『死ぬのね』

否定すら出来ない自分がいた。何も出来ない弱い自分がいた。

なおも、彼女は言葉をつづる。

『怖い』

『怖いよ』

『怖い』

『怖い』

『死にたくない』『怖い』『怖い』

『死にたくない』『怖い』『こわい』『死にたくない』『こわい』

『死にたくない』『しにたくない』『こわい』『しにたくない』『しにたくない』『こわい』『しにたくない』

僕の手はその言葉でいっぱいになった。

紙なのに、両手に重さを感じた。

『捨てて』『制服なんて』

『捨てて』『そんな希望いらない』

『そんな希望は』『あるだけ』『無駄』

『もう嫌』『何でこんな目に』

僕の手は震えていた。

これほどまでに彼女を追い詰めるものが、彼女に存在していたこと。

そしてそれを、一人で抱え込んでいたこと。

僕を頼って欲しいとは思わない。しかし、押し隠した心のままであんな約束をしようというのは、僕にとって嬉しいものではない。

僕が彼女にとって、ただの話し相手で、頼りない人間だってことは、僕も認めざるを得ない。

だが、それを激痛が襲ったショックで一気に爆発させる彼女は、僕にとって苛立ち以外の何物でもなかった。

自分を隠そうと努力するぐらいなら、最初から弱いままのほうがいい。

僕は、次第に自己中心的に肥大化していく炎を食い止めることが出来なかった。

「――うるさい！」

僕は紙の束を彼女に投げつけて、病院から消えたのだった。

最終話

……僕は一体何をしているのであろうか。

苦しんでいる彼女に、僕はとんでもないことをしてしまったのではないか。

後悔が耳障りな旋律となって僕に押し寄せる。

僕は彼女の矛盾の裏にある本心を知ってしまった。

明るく、一見前向きに見せていた彼女が、本当は死を誰より恐れていた。

僕は勘違いをしていた。

彼女が冗談めかして言った死は、本心の裏返しだ。

死の恐怖を知り、そこに生への渇望を求めていた。

僕と約束することで、彼女自身の励みにしようとしていた。

必死に生きようとしていた。

死に抗おうとしていた。

かたちはどうあれ、彼女は一人で戦っていたのだ。

あきらめと、未来への展望を同居させながら。

それなのに、僕は何をしている。

彼女の恐怖に比べたら、僕の悩みのなんと小さいことか。

僕は彼女を責める権利などない人間なのだ。

ピアノから逃げ出してしまうような人間なのだから。

僕は弱い。

今は分かる。

僕は弱い。

まだ、僕は生きて二十年にも達していない。未来はどこまでも開けている。

なのに、一時の挫折だけであきらめてしまうのは、愚の骨頂ではないのか。

人生は挑戦だ。

生命の続く限り、挑戦するべきだ。

才能を有するものが、一の努力をするなら、僕は十の努力をして、才能を凌駕してやる。

そして、今は才能があるとかないとか、そんなことはどうだっていい。

彼女は僕の音色を必要としている。

彼女が必要としている事実、それだけで十分だ。

僕には才能があったって、なくたって関係ない。

――僕は、僕にしか出来ないことをするから。

僕は病院へ引き返す途中、ある植物を買った。

それは、不器用な僕に出来る、唯一の優しさの意思表示だった。

病室に入ってきた僕を見た彼女は、至って冷静そのものだった。
僕は、彼女の目の前に鉢植えを下ろした。
身長一メートルは超えているだろう。

『これは？』

目を赤く腫らしたまま、書いて見せた。
僕は、かつてないしっかりとした口調で答えた。

「【梔子（くちなし）】だよ」

僕の声を聞いた直後、彼女の顔は悲しみと失望の色に染められた。

『梔子』

『それは【口無し】ってこと？』

『酷いよ』『私、君だけは』『そんなことをする人じゃないと』『思ってた』

『なのに』『酷い』『酷すぎる』『嫌い』『大嫌い』

『何が楽しいの？』『最低だよ』

僕は呆然としていたが、あわてて彼女の書き連ねる手を止める。
彼女が僕の手を振り解き、再び書き始める。
それでも僕は、彼女の行為を止めようとする。
しかし、彼女はより強い力で抵抗した。だから僕は、無理矢理彼女を抱きしめ、出来る限り優しく言葉を形成した。
形成された僕の本心は、彼女の傷つき、疲弊しきった心に届いただろうか。

「口が利けないから【口無し】じゃない」

僕に出来ること。

「永久に生きるから【朽ち無し】なんだ」

それは、彼女と約束すること。

約束は未来にするものだ。
僕の心はうわべじゃない。彼女には永遠に生き続けて欲しい。切にそう願う。
僕の心の中で——とか、そういうものではなく。
僕と同じ時を、僕と共に感じて欲しい。

歓喜や、怒り、悲哀、苦痛、それら全てを分かち合いたい。

僕の気持ちは抱きしめる強さ。

彼女の動きが止まり、ほんのわずかだけだが、震えていた。
やがてそれが嗚咽に変わる。

「……千夏に勝つよ。僕は……千夏の病気が治る前に、絶対にピアノコンクールで入賞する」

僕の耳のそばで、彼女の嗚咽がいつまでも、いつまでも、響いていた。

……僕は帰り道、彼女からの伝言を読んだ。

『私も頑張る。君に勝つように』

僕が彼女にもらった文字の中で、最も筆圧が強かった。

それからの一ヶ月、僕は再びピアノと向き合い、ついにピアノコンクール入賞を果たした。

僕は急いで病院へと疾走した。
その道すがら、僕は思いを胸に膨らませていた。
彼女は僕が入賞したことを聞いたら、どんな顔をするだろうか。

『おめでとう』

と書いて笑顔を見せるだろうか。それとも。

『負けちゃった』

と書いて悔しがるだろうか。
一ヶ月も会わなかったことで、僕の心は彼女の笑顔を想像してやまない。
実際、ピアノコンクールで演奏しているときも、彼女の笑顔が心の中にあった。

彼女――千夏の表情。

僕に紙を渡すときの彼女の嬉しそうな表情。
そして、僕が返答するまでの彼女のわくわくした表情。
自分の病気をかえりみず僕の心配をしてくれた彼女の憂慮の表情。
【口無し】と誤解したときの彼女の怒った表情。
泣きながら見詰め合ったときの表情。

その全ての表情が、昨日のことのように思い出せた。
毎日想っていたから忘れることのなかったあの表情。

僕は走る勢いそのままに、彼女の病室のドアを開けた。

「千夏！」

病室には何もなかった。

病床も綺麗に整えられ、染み一つなく、壁にかけられていたはずの萌黄色の制服も見当たらない。

月下美人も、梔子も、そしてなによりも千夏が見当たらなかった。

僕は混乱した。

確かにこの病室で間違いないはずだ。

三階で、突き当たりの廊下を曲がった後の、三番目の病室。

ここは、その病室だ。間違いない。

僕は、約束を思い出した。

「……あ、そうか、競争に負けたのか……。そうか……千夏、治ったんだ……」

その刹那、背後から僕の名前を呼ぶ声がした。そこに立っていたのは――

――千夏の母親だった。

母親は、僕に何かを包み隠すような堅固な面持ちで、

「千夏のイシです」

と言って、テープレコーダーを差し出した。
そのテープレコーダーは、間違いなく彼女が僕から遠ざけていたものだった。
僕は訳も分からぬままそれを受け取ると、再生ボタンを押した。
テープ独特の静かなノイズ音が辺りに響く。

――……せ……ち……。

僕は先程の母親の言葉を考えていた。
イシ、と言った。すなわち、意思か、それとも遺志か。

――せ……い……ろ……う……。

僕は彼女の母親を視界におさめるが、母親は深く頭をたれたままだった。
なぜ彼女の母親が、これ以上何も言おうとしないのか不思議だった。
退院したのだから、もっと喜びを表してもいいのではないか。

――……いー……ろ……。

それにこの声は何なのか、聞いたこともない美しい声。

――せいー……う……。

とつとつと話しているようにも聞こえるが、ただ単に話せないだけなのかとも思える。

千夏は一体誰の声を録音したのだろうか。

――せい……ろう……。

なぜだろうか、僕は鼻がつんと痛くなった。

それは、自分の中で生まれる信じがたい推測がゆえだ。

――ち……う……せい……。

涙が涼雨の如く流れていく。

なぜだろうか。

きっと彼女の退院を祝う、喜びの涙なのだろう。

そう言い聞かせた。

――……せいいい……ち……ろ……。

「これは…娘の声なんですよ…」

彼女の母親の声は酷くかすれていた。心なしか、目元が腫れている。

――……せいいい……ちろ……う。

「彼女は、千夏は今どこにいるんですか?」

僕は耐え切れずに聞いた。

彼女に話したいことが一杯ある。一日では語りつくせないくらい多くの話。

――……せいちろ……。

そして僕は数秒後、彼女の母親の言葉に、胸を詰まらせることになる。

――……征一郎……。

それは、僕の名前だった。

最終話（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
以前投稿したものを携帯電話での読書用に修正しました。ダッシュの使い方、三点リーダ等の使い方も、正しいものに変更いたしました。お見苦しいままほおっておいた作者をお許しください。
評価、感想、栄養になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4266a/

僕

2010年10月10日17時32分発行